

緑のまきば

2005 No.38

小金井緑町教会
 小金井市緑町四一六一三三
 電話〇四二一三八一七九六一
 牧師 山畑 謙

説教

『おはよう』

山畑 謙

「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行つた。すると、イエスが行く手に立って、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。」

復活の朝、主イエスは婦人たちに現れて言われます。「おはよう」。元々のギリシア語では、「喜ぶ」という動詞の命令形になっています。この喜ぶという言葉は、挨拶に使われる言葉でもあります。「ようこそ、おはよう、こんにちは、今晚は、さようなら、おめでとう、バンザイ！」等々。いつも主が婦人たちにしていた挨拶を、復活なさった主がいつものようにしてくださったのです。それは本来の「喜べ！」という意味で受け取ることもできるものです。しかし、それがどこから発せられたと言え、とても喜びにはそ

ぐわらない場所、「墓場」から発せられています。

(マタイ二八・八九)

墓場は死の忌まわしさと、死別の悲しさや寂しさが支配している場所です。時には、静まる場所として、人の栄華のはかなさを知る所としては、よい場所ではあるかもしれせん。しかしそこは、喜びを見出し、喜びが告げ知らされる場所とはなり難い所です。なぜなら決定的に人と人とを分断していく「死」が支配している場所だからです。いつも呼ばれて、答えていたことが、罪による断絶で途絶えていきます。そしてその極みにあるのが、死

による断絶で、呼ぶ声も聞こえてこなくなってしまう。

罪の断絶の彼方から、死の断絶の彼方から、なほ呼ぶ者がどこにあるでしょう。ただお一人、十字架に死に、陰府に下り、三日目によみがえりたもうた主イエスこそが、罪と死の断絶を踏み越えて呼びかけてくださるのです。墓はもはや断絶と悲しみの場ではなく、新しい命のはじまりの場、主の呼びかけを聞く場とされました。

「おはよう」の箇所を英語の聖書(NKJ)で見ると、*Good morning*「喜べ！」となっています。同じ言葉をウエストミンスター大教理問答の第一問に、次のように見出すことができます。

問一 人間のおもな、最高の目的は、何であるか。

答 人間のおもな、最高の目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を全く喜ぶことである。

主の「おはよう」は、私たちの人生に最高の目的を与えるかけがえのない一言です。二度と主の呼ぶ声を聞くことはできないと皆思っていました。それな

にいつものように「おはよう」と呼びかけられた時、どんなに嬉しかったことでしょう。そうやって呼んでもらうことが、本当はとても大事なのではないのでしょうか。そこから始まるのではないのでしょうか。父や母が私どもの名前を呼んで、呼びかけてくれた日々を思い起こすことができます。呼ばれるということは、逆に呼んでいる者が「わたしはここにいる」ということを表していることでもあるからです。

主の「おはよう！」という呼びかけは、「私がここにいる」という呼びかけであり、私たちの応答を待っている呼びかけでもあります。その呼びかけに対して、私たちも御前にひれ伏し、主を礼拝し、「わが主イエスよ」と呼ぼうではありませんか。復活の主を信ずるとは、その主との交わり(応答)に生きることだからです。